

## 前期日程合格発表

今年度の国公立大学前期日程の合格者が82名となった。これは日々の授業を大切にしながら、放課後や休日にも粘り強く学習に取り組んできた三年生一人ひとりの努力の賜物である。思うように結果が出ない時期もあっただろうが、そのたびに自身と向き合い、仲間と励まし合いながら努力を続けてきたその姿勢は賞賛に値するものである。

ただ、この成果は決して個人の力だけで成し遂げられたものではない。互いに高め合う友人の存在、支え続けた保護者の方々、そして日々指導にあたった先生方など、多くの人の支えがあってこそその結果であるといえる。受験を通して得た経験は、これからの人生においても間違いなく大きな財産となろう。

一、二年生にとって、今回の先輩たちの活躍は大きな励みになるはずだ。進路実現は決して特別な人だけのものではなく、日々の積み重ねの先にある。授業への真剣な取り組み、家庭学習の習慣、そして目標を持ち続けること。その一つ一つが、将来の自分自身を形づくるのである。先輩たちの姿を手本に、今できることを着実に積み重ねていってほしい。三年生が示してくれた「挑戦する姿勢」と「最後まで努力を続ける粘り強さ」を受け継ぎ、先輩たちの背中を追いながら、自分自身の目標に向かって一步一步前進していくことを期待している。



## 中・後期日程入学試験

三年生の受験がひと区切りを迎えた。前期試験の可否発表を経て、国公立大学の中期・後期試験に臨んだ生徒も少なくない。すでに進路を決めた友人が増えていく中で、教室や自習室に残り続ける日々は、想像以上に緊張感のある時間となる。前期試験で思うような結果が出なかったとしても、中期・後期という機会がある。各大学の試験会場には、粘り強く努力を重ねてきた受験生の姿があったことだろう。このように最後まで挑戦できたという経験そのものが、大きな意味を持っている。

一方で、この経験から見えてきた課題もある。それは基礎学力の重要性だ。三年生になると演習中心の学習に追われ、弱点を一から立て直す時間を確保することが難しくなる。中期・後期まで受験が続いた場合、支えになるのは応用力よりも、むしろ確かな基礎である。日々の授業内容を着実に理解し、苦手分野を放置しないことが、最終的な粘りにつながるという。

また、模試の判定に「必要以上に」左右されない姿勢も大切だ。判定はあくまでその時点での到達度を示すものであり、努力次第で変化する。実際、思うような判定が出なかった科目でも、復習を重ねることで手応えを感じられるようになった例は少なくない。

これから受験を迎える一、二年生にとって、三年生の今の姿はまだ遠い未来に映るかもしれない。しかし、受験勉強は突然始まるものではなく、日々の積み重ねの延長線上にある。時間に余裕のある今こそ、基礎を固め、自分の学習習慣を確立してほしい。中期・後期まで挑戦する可能性も含め、受験は長期戦である。その現実を知ることが、最初の一步となる。

## 合格体験発表会

3月24日(火)6校時(14:15~15:15)に合格体験発表会が行われる。総合型学校推薦型合格2名、一般入試前期2名、一般入試後期1名の計5名の先輩方が、受験に向けての心構えや勉強をするうえでのコツ、後輩へ伝えたいことといった内容で、それぞれ5分ずつ語ってくれる。一、二年生はしっかりと耳を傾け、自身の糧としてほしい。その内容は次年度の「進路参考資料」に掲載される。一年生には1冊、二年生には2冊の進路参考資料がすでに配布されているはずである。過去の先輩たちの合格体験に目を通して、今年度の発表会に臨んでほしい。

ぜひ読んでみよう!!!



## むごい教育

戦国時代の逸話として、駿河・遠江の大名であった今川義元が、幼少期の松平竹千代(後の徳川家康)に対して「むごい教育」を施そうとした、という話が伝わっている。ここでいう「むごい」とは、厳しくすることではなく、ほしい物は何でも与え、美食を楽しませ、好きなことだけをやらせ、少しのことでも過剰に褒める。そのようにして困難や不足を経験させず、自制心や忍耐力を育てない——そうして将来大成できない人物にしてしまおう、という発想である。真偽のほどは定かではなく、家康が自身の子ども達を戒めるためにした作り話だという説もある。当時、今川家は領国であった駿河・遠江に加え、やっとのことで三河を手中に収めたばかりであった。今川家が三河の領国化を進めていくうえで、その三河の国衆の中心的存在であった松平家の跡取りが優秀では困るというところに結びつけたのであろう。



さて、この逸話の中で竹千代が置かれた環境は、一見するとうらやましく思える。しかし、この逸話が示しているのは「甘やかし」が最も残酷な教育になり得るという逆説である。努力を求められず、我慢を覚え、失敗から学ぶ機会を奪われた人間は、いざ自分で道を切り開かなければならない場面で踏ん張ることができない。短期的には快適でも、長期的には自立の力を失わせてしまう。

現代の私たちにとっても、これは他人事ではない。スマートフォンや動画、ゲームなど、誘惑は身近にあふれている。疲れたらすぐ休み、課題は後回しにし、少しできただけで自分を十分だと納得させてしまう。誰かが強制しなければ動かない状態は、形を変えた「むごい教育」に近いともいえる。

受験勉強は楽ではない。思うように成績が伸びず、自分の未熟さを突きつけられることもある。しかし、その過程で身につく計画性や忍耐力、自己管理の力こそが、将来の土台になる。自分を甘やかすことは簡単だが、自分を律することは簡単ではない。

本当に自分のためになる環境とは、快適さに包まれた場所ではなく、少し背伸びを求められる場所である。今、目の前の学習にどのような姿勢で向き合うか。それが数年後の自分を形づくる。誘惑の多い時代だからこそ、「むごい教育」に身を委ねるのではなく、自らを鍛える選択をしてほしい。